

第1回トピックス	第1回総合教育会議における委員・市長の意見、コメント	施策の方向性（案）	基本方針（新）案
①乳幼児期、就学前の教育・保育の質の向上と小学校への円滑な接続	・「小1プロブレム」等、小学校のスタートを円滑にするための課題への対応が必要だが、保育所との連携は心もとない部分がある。（教育長） ・保育指針にも「教育」という観点に加わり、市長部局と教育委員会の歩み寄りによる交流、教育内容の検討の必要がある。（織田委員） ○市長部局と教育委員会による今後の対応は課題。連携のためのアクセス性なども課題である。（市長）	義務教育への円滑な接続 保幼小連携の推進	「学びのスタートライン」に向けた教育・保育の充実 （乳幼児教育の充実、小学校への円滑な接続、家庭教育の支援）
	・就学前にはどこに行っても同じような教育が受けられることを内閣府が求めている中で、独自の特色を持つ幼稚園の取り扱い（織田委員） ・幼稚園教育の現場に、もっと大学の幼児教育研究機関の知見を波及する取組も必要ではないか。（渡部委員） ○大学の研究フィールドとしても市を活用しつつ、市の教育も実施していくことが重要。（市長） ・保育の質を高めるための研修を受講できる機会を増やしてほしいとの現場の声がある。（長嶋委員） ・私立も含めて保育士、幼稚園教諭の質の向上のためのサポートが必要ではないか。（坂越委員） ・一つのメイン、柱になりうる。県が積極的に取り組んでいる。広島大学に中心となっている機関、教授がいる。連携・協力を検討しては。（坂越委員）	就学前の教育・保育の質の向上	
	・祖父母世代と親世代の子育てに関するギャップの解消のため、今の子育ての現状を学ぶ機会の提供が必要（長嶋委員） ○県のセンターでの取組も参考に情報を収集、提供していければと思う。（市長） ・家庭の役割も重要であるが、家庭と関わろうとしたときにどこがキーステーションとなるかが課題。（坂越委員） ○家庭へのアプローチとして「ネウボラ」の中で、将来的には教育・保育機能も取り入れる方向で進めている。（市長） ・幼児教育の無償化にともなって、家庭・親の役割の希薄化を懸念する。（織田委員）	家庭における子育て、教育の支援	
②市の特色ある教育スタイルを活かした、課題発見と多様な状況における課題解決力の育成	・「東広島スタンダード」「一校一和文化」などは、子どもが数値に見える学力ではなく「心の教育」の部分が大きい。これからも続けていくべき。（織田委員） ・「東広島スタンダード」は家庭においても浸透してきている。「一校一和文化」もそうだが、家庭の役割は大きい。（長嶋委員）	心の教育（学力、体育とともに国の計画の文言を参酌）	高い教育力と伝統を活かした学校教育の実践
	・「和文化」などの取組が行われているが、バーチャル化の進展によって、今後は「体験型の教育プログラム」が重要性を増してくる。（渡部委員）	体験型の教育	
	・本市の高い教育力は、教員の熱意・指導力によるもの。若い教職員をどう育てていくのが一番の課題。（教育長） ・各学校の取組によって、子どもたちへの成果は上がっていると思う。今後は西条教育の伝統をどう伝えていくかが課題。柱としては、もう少し教職員が我がものにできるよう工夫が必要である。（坂越委員） ○市の教育力は高い。今後どのような形で維持・発展していくのか考える必要がある。（市長） ○県の大綱にある「教職員の力を発揮できる環境の整備」など、良い教育を継続できる体制づくり、人材育成を研究したい。（市長） ・「不易と流行」という言葉があるが、伝統的な市の教育があって、時代に合った教育が展開できる。先輩教員・OBが伝えていくことが大切である。（織田委員） ○守るべきものは守り、その上に何を加えていくのが重要である。（市長） ・家庭が教育に関わっていくために、市が教育としてどのようなことをしているのか、もっと保護者が知っていただき、協力していただくことが重要。（長嶋委員）	教職員が能力を発揮するための環境整備 教育施策についての情報発信の充実	
	・就職後に高校に通いたいという志望を抱いた子どもが、学び直しの機会を得られるような施策があればよいと思う。（織田委員） ○学びのセーフティネットという観点も盛り込んでいく必要がある。（市長）	市としての「学びのセーフティネット」の構築	

第1回トピックス	第1回総合教育会議における委員・市長の意見、コメント	施策の方向性（案）	基本方針（新）案
③義務教育から高等教育に向けた理科系教育の強化	○カリキュラムに採り入れるには難しい部分もあるが、創造力のある子どもをこれからの社会に向けて育てていくには、STEM教育などの理科系教育は重要であると認識している。 ○マイスター教育など、他の機関の力も借りつつ、保護者と子供が一緒に取り組む仕掛けをしつつ、自然科学やものづくりに関心をもつような環境づくりが必要。（市長） ・学習指導要領の中で理科系教育をどう推進していくのか課題がある。モデル校の指定や学校教育のカリキュラムを離れて、「伸びるところを伸ばす」という手法・アプローチも考えられる。（教育長） ・実験の仕方、論理の示し方など、教職員の能力を身に着けるためのプログラムが必要ではないか。そのプログラムを大学と連携して作るのも新たな考え方である。（渡部委員） ・いきなりではなく、まず教育委員会が指定校などをつくり、そこから市内の学校に展開することなどから始めるべき。（織田委員） ・まずは、科学研究などが、子どもと保護者が一緒に何かを発見することを楽しめるような形になればよい。負担感がある。（長嶋委員） ・慶応大学理工学部での取組のように、大学、企業と連携して、子どもたちに体験させるプログラムなどは、検討の余地がある。（坂越委員） ・理科系教育は、これからの社会を生き抜く力を身に着ける教育と位置付けることはできるが、公立の教育として、全体の底上げを図るのか、特化したプログラムを実施するのかという課題がある。（坂越委員） ○京極委員からも、近畿大学工学部との連携について前向きなコメントをいただいている。（市長）	子どもの興味・関心を引き出し、伸ばす教育の展開 ・理科系教育 ・職業教育 新たな時代に対応した教員の指導力の向上	新たな価値を創造する人材の育成を目指した教育の展開
	・就職後に高校に通いたいという志望を抱いた子どもが、学び直しの機会を得られるような施策があればよいと思う。（織田委員） ○学びのセーフティネットという観点も盛り込んでいく必要がある。（市長）	市としての「学びのセーフティネット」の構築	
④知的資源との連携による学習意欲の促進と、異なる文化への寛容性の育成	・日本語での生活、あるいは学習支援をするのと同時に、外国との接点が多いことをプラスに捉えて取り組みたい。（教育長） ・スポーツや芸術、文化を伝えるためには、その背景をしっかりと理解する必要がある。そうした指導が必要。（渡部委員） ・外国との姉妹校提携。ICTによる対面授業や交流も可能になるのでは。（坂越委員） ・特に小学校段階では、環境を活かしてしっかりと子供たちが触れ合うこと、一緒に何かをするのが良い。（織田委員） ・地域によっては外国の方との触れ合いに差があるので、自然と触れ合える体制を考えてほしい。（長嶋委員）	異文化への理解と寛容性の育成	「知的資源」と「国際性」を活かした人づくり（知的資源との連携による学習意欲の促進と、異なる文化への寛容性の育成）
	【再掲】 ・幼稚園教育の現場に、もっと大学の幼児教育研究機関の知見を波及する取組も必要ではないか。（渡部委員） ○大学の研究フィールドとしても市を活用しつつ、市の教育も実施していくことが重要（市長）	大学、企業と連携した教育プログラムの展開	
		研究機関・企業と地域・市民の交流、連携の促進（承継）	

第1回トピックス	第1回総合教育会議における委員・市長の意見、コメント	施策の方向性（案）	基本方針（新）案
⑤市全体を生涯学習のキャンパスに	・これまでの流れを切らず取り組む。ここでも大学との連携がキーワードになる。（教育長） ・広大マスターズの周知、充実。（渡部委員） ・実際にいろいろと講座に参加している。高齢者の参加も多く、これまでの取組が功を奏している。継続してほしい。（織田委員） ・子どもを生涯学習にどう組み込んでいくか。（坂越委員） ・単位等履修生制度の活用（渡部委員） ・「生きがい」の部分は充実している。「学び直し」の部分については、大学・企業との連携が重要になってくると思う。（坂越委員） ○防災など、行政が積極的に推進すべき分野など、整理が必要な時期に来ている。（市長）	生涯を通じた学び・能力開発の機会の提供	市全体が生涯の「学びのキャンパス」となるための環境づくり （生涯にわたって学び続けられる環境の形成）
		・生きがい ・学び直し ・市民生活に欠かせない「学び」（命を守るための）	
		歴史・文化の継承と新たな市民文化の創造	
		（生涯にわたってスポーツを楽しめる環境の形成）	